第四講　『袋草紙』　関西大学

次の文章は、平安時代後期の歌学書『袋草紙』（藤原清輔著）の一節で、冒頭の和泉式部の和歌をめぐる問答である。これを読んで、後の問いに答えよ。

今朝はしも思はむ人はとひてましつまなきねやの上はいかにと

問ふ、「女歌にては、〈つま〉とはよみてんや。ただ、〈つまなきねや〉とよみたるは、さてはよしなうこそおぼゆれ。〈*1つまなきこひをわれはするかな〉といふことをおもひたるにや。それはいはれたるものを」。

答ふ、「これはいかに侍るべき事にか。ただ年ごろ知り給ひたるやうは、〈つま〉といふ事は、男女のなからひは、これかれ〈つま〉といふと知りて侍りつるなり。男は女を〈つま〉といひ、女も男を〈つま〉といふなり。女を〈つま〉といふべしとなにに見えたるにか。これは*2証歌多くや侍らん。まづ伊勢物語に、*3〈つまもこもれりわれもこもれり〉といへる歌は、女の歌にて、男のむさしのにこもりたりければ、野を焼かむとしければ、女のよみ侍りけるなり。〈つまもこもれり〉とは、われが男をいへるなるべし。〈われもこもれり〉とは、女のことにや」。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

なほ問ふ、「のたまはせたること、いはれたり。世に*4歌枕とて侍るめるに、多くは女(め)を〈つま〉といふ。もしはまた、〈わかくさ〉といふ。またある本には、のたまはするやうに、女男(めをとこ)の中を〈つま〉といふとも書かれたるやうに覚ゆれば、いづれか一定ならむとも申しがたし。さて伊勢物語は、その歌の心を案じ侍るに、もしかきたがへたるにや。また女の男にかはりたるにや、とも思ひたまふるなり。その故はこれ、男、人のむすめをぬすみて、むさしへゐてくるほどに、ぬす人なりければ、国の守(かみ)にからめられにけり。女をばくさむらの中におきていにければ、みちゆく人、〈この野はぬす人あなり〉とて火をつけんとするに、女のよむと書かれて侍るめり。されば、ふたりながらこもれりとは見え侍らず。これ先の歌にたがひたり。また、〈わかくさの〉といふは、男のことばにてこそいはれてはべらめ、女のたちまちに男をわかしといはんもいはれず。また、〈わかくさ〉といふ事は、妻をいふとはべめれば、〈あしひきのやま〉〈あらたまのとし〉などいふやうに、〈わかくさのつま〉などはよまれて侍るにこそあめれ。またこの歌を古今に、〈題、よみ人しらず〉と書きて、〈かすがの〉と直されてはべめれば、これにつけてもうたがひのこれるなり。*5日本紀に、すさのをの〈いづもやへがきつまごめに〉とよみ、また*6明日天皇の皇后に送る歌に、〈あひおもふつま〉とよみてはべるは。また万葉には、よろづのこと、ともかうも書かれて侍るものなれば、さだめがたう侍れど、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〈妻〉と書きて〈つま〉とよみ、また〈嬬〉をも〈孋〉をも〈つま〉とこそはよみて侍るめれ。されば*7字書に、「妾(せふ)の義なり」とこそ釈せられてはべれ。さだまらずといひながら、さすがに〈春〉の字を〈秋〉とよみ、〈雪〉を〈霞〉とはよまれはべらぬものをば。所の名にも、〈朝妻〉〈吾妻〉をば〈つま〉〈つま〉とこそはいひつたへて侍れ。したしきを〈つま〉とよまば、〈夫〉の字、〈父母〉〈兄弟〉の字をも、〈つま〉とよまれて侍らんや。ただし、式部はなかごろの上手に侍れば、男を〈つま〉とよみて侍れば、ゆゑ侍らん。さればひとへに難ずべきに侍らず。Ⓐ<u>ただ証歌を承りて、心のうたがひをたばやと思ひ給ふるなり</u>」。

*8予これを案ずるに、万葉集に、松浦(まつら)佐夜姫を詠ずる歌にいはく、

とほつひとまつらさよひめつまごひにひれふりしよりおへるやまのな

かくの如きは男をも〈つま〉といふか。またいはく、

たなばたのつままつよひの秋風にわれさへあやな人ぞこひしき

かく侍れば、男をも〈つま〉といふにこそ。

（『袋草紙』による）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

注

＊1　つまなきこひをわれはするかな＝和歌の下の句と思われるが、出典は未詳。

＊2　証歌＝和歌をよむときの根拠としてひかれるべき歌。

＊3　〈つまもこもれりわれもこもれり〉といへる歌＝上の句は、〈武蔵野は今日はな焼きそわかくさの〉。

＊4　歌枕＝和歌によくよまれる地名や歌語を集めて解説したもの。

＊5　日本紀＝日本書紀のこと。

＊6　明日天皇＝日本書紀にある「明日、天皇」を誤読したもの。

＊7　字書＝辞書のこと。

＊8　予＝著者である藤原清輔のこと。

© RECRUIT HOLDINGS

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　最初の質問において、冒頭の和歌のどういう点が問題にされているか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　作者が女性であるという立場から、「妻のいない寝室」とよむのはいわれがないように思われる。もしこの「つま」のことを、男女を問わず、「恋人もいないのに恋をしている」という歌を意識しているというのなら、それなりの理由があるのだが、それでは真実の恋の歌とはいえないのではないか、という疑問が述べられている。

b　作者が女性であるという立場から、「妻のいない寝室」とよむのは妥当なこととは思われない。本来「つま」とは女性に限定されるべきものなので、もし作者が男性の立場に身を置き替えてよんだとするなら、それなりの理由があるのだが、そのような理解をするのは無理があるのではないか、という疑問が述べられている。

c　作者が女性であるという立場から、「妻のいない寝室」とよむのはいわれがないように思われる。もしこの「つま」のことを、男女を問わず、「恋人もいないのに恋をしている」という歌を意識しているというのなら、それなりの理由があるのだが、女性歌人がよんだ歌において、「つま」とよむのはほんとうに妥当かどうか、という疑問が述べられている。

d　作者が女性であるという立場から、「妻のいない寝室」とよむのは妥当なこととは思われない。本来「つま」とは女性に限定されるべきものなので、この和歌の作者を女性とみるのは誤りで、男性の作であるとみるべきであり、そうならばそれなりに理由がつくのではないか、という疑問が述べられている。

e　作者が女性であるという立場から、「妻のいない寝室」とよむのはいわれがないように思われる。もしこの「つま」のことを、男女を問わず、「恋人もいないのに恋をしている」という歌を意識しているというのなら、それなりの理由があるのだが、まるで妻がいないそぶりをしているというなら、それはおかしいのではないか、という疑問が述べられている。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　最初の質問に対する答えはどのようなものだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　そもそもこの質問の趣旨がよくわからないのだが、私がただずっと前から知っていたことは、男女の間では、双方どちらからでも「つま」ということであり、女性についてだけ「つま」というべきだという説が何に出ているのか根拠がない、という答えだった。

b　そんなわかり切ったことをどうして質問されるのかがよくわからないのだが、私がただずっと前から知っていたことは、男女の間ではとりあえずお互いに「つま」といってもよいということであり、男からも、女からも「つま」というべきだという説が何に出ているのか根拠がない、という答えだった。

c　質問の趣旨をどのようにとらえてよいのかがわからないのだが、私がただずっと前から知っていたことは、男女の間では、双方どちらからでも「つま」ということだったが、男性についても女性と同じように「つま」というべきだという説が何に出ているのかはよく知らない、という答えだった。

d　これは自分でも疑問に思っていたことなのだが、私がただずっと前から知っていたことは、男女の間ではあれこれとさまざまな言い方があるが、男女双方で言い方が混乱してはいけないので、女性を「つま」というよりもむしろ男性を「つま」というべきだろう、という答えだった。

e　これをどう理解すればよいのかいっしょに考えたいのだが、私がただずっと前から知っていたことは、男女の間を取り持つ場合に、男女どちらについても「つま」というのが好都合だったということで、女性のみを「つま」というのはどういう理由か見当がつかない、という答えだった。

問三　最初の質問に対する答えの中で、伊勢物語の「武蔵野は今日はな焼きそわかくさのつまもこもれりわれもこもれり」という和歌は、どのように説明されているか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　男が女のことをよんだ歌であって、自分が武蔵野に隠れていたところ、その野を焼いてしまうということになって、「つ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ま」である女もわたしも二人ともこもっているから、焼かないでくれと訴えた歌である、と説明されている。

b　男が女のことをよんだ歌であって、「つま」である女が武蔵野に隠れていたところ、その野を焼いてしまうということになって、それならいっしょにこもって、ともに焼かれてしまいましょうとよんだ歌である、と説明されている。

c　武蔵野にこもっている男女が焼かれそうになったとき、互いの身の上を気づかって、双方から「つま」と呼びあいながら、どうか焼かないでくださいと懇願している歌である、と説明されている。

d　女が男のことをよんだ歌であって、男が武蔵野に隠れていたところ、その野を焼いてしまうということになって、「つま」である男もわたしも二人ともこもっているから、焼かないでくれと訴えた歌である、と説明されている。

e　女が男のことをよんだ歌であって、武蔵野に隠れている男のことを気づかって、その野を焼くというのなら、「つま」であるわたしがこもって身代わりになりたいと願った歌である、と説明されている。

問四　二度目の質問において、「武蔵野は今日はな焼きそわかくさのつまもこもれりわれもこもれり」という和歌のどのような点が問題にされているか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　男性が人のむすめを盗んで武蔵野まで連れて来たところ、盗人として捕えられた。その際、女性を草むらに置いて去って行ったということになると、盗人ととがめられたのは女性ではなく男性のほうなので、女性のよんだ歌とするのは間違っているという点が問題にされている。

b　男性が人のむすめを盗んで武蔵野まで連れて来たところ、盗人として捕えられた。その際、女性を草むらに置いて去って行ったとあるのだから、捕えられたのは男性ではなく、女性のほうで、そこで男性と女性の取り違えが生じているという点が問題にされている。

c　男性が人のむすめを盗んで武蔵野まで連れて来たところ、盗人として捕えられたとされるが、和歌では「つまもこもれりわれもこもれり」とあるので、実際に捕えられたのは男性と女性の二人だったということになって、説明と食い違うという点が問題にされている。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

d　男性が人のむすめを盗んで武蔵野まで連れて来たところ、盗人として捕えられたとされるが、じつは二人とも草むらに隠れて無事に逃げられたのであり、それを、なぜ男性の歌として「つまもこもれりわれもこもれり」とよんだのかという点が問題にされている。

e　男性が人のむすめを盗んで武蔵野まで連れて来たところ、盗人として捕えられた。その際、女性を草むらに置いて去って行ったとあるのだから、その野が焼かれかけたときに女性がよんだのならば、「つまもこもれりわれもこもれり」とはいえないはずだという点が問題にされている。

問五　「わかくさの」という語について、どのような主張が述べられているか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　「わかくさの」という語は、「あしひきのやま」などと同様に、一般的には「わかくさのつま」と「つま」にかかる枕詞ではあるが、必ずしも妻のことをよむとは限らず、女性から男性に呼びかける歌に用いてもさしつかえない。

b　「わかくさの」という語は、「あしひきのやま」などと同様に、「わかくさのつま」と「つま」にかかる枕詞であり、女性のよむ和歌の言葉として最適であるが、男性から女性を「わかくさの」と呼びかけるのはおかしい。

c　「わかくさの」という語は、「あしひきのやま」などと同様に、「わかくさのつま」と「つま」にかかる枕詞であり、男性が妻のことをよむのに用いるのであって、女性が男性のことを「わかくさの」と歌うことは道理に合わない。

d　「わかくさの」という語は、「あしひきのやま」などと同様に、「わかくさのつま」と「つま」にかかる枕詞であるので、これを実際の「若草」として用いるのはおかしい。

e　「わかくさの」という語は、「あしひきのやま」などと同様に、「わかくさのつま」と「つま」にかかる枕詞であり、妻のことをよむものであるが、女性が男性のことを唐突に「若い」とよむのはかなりあやしい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問六　「つま」という語の表記について、どのように説明されているか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　万葉集ではさまざまな表記があって一定しないが、それでも「妻」という文字があれば「つま」とよむことは明白であり、ときには親しい間柄を「つま」ということがあっても、「朝妻」や「吾妻」というように明確に「妻」の文字を入れて表記するほうがよい。

b　万葉集ではさまざまな表記があって一定しないが、それでも「妻」という文字があれば「つま」とよむことは明白であり、親しい間柄であっても「夫」や「父母」などと書いて「つま」とよまれることはないので、男性から女性に向けて「つま」というのがふつうである。

c　万葉集ではさまざまな表記があって一定せず、「妻」という文字があっても必ずしも「つま」とよむとはかぎらないから、親しい間柄のことを「夫」や「父母」などと書いて「つま」とよまれることがあったとしても、とりたてて不思議なこととはいえない。

d　万葉集ではさまざまな表記があって一定しないが、それでも「妻」という文字があれば「つま」とよむことは明白であり、一方、きわめて限定的であるが、とくに「夫」や「父母」といった親しい間柄の場合には、これを「つま」とよむこともまた、明白である。

e　万葉集では「妻」という文字以外で「つま」とはよむことがないのは、「春」の文字以外で「はる」とよむことが決してないのと同様であって、従って男女双方が親しい仲だというのを「つま」ということにはならず、やはり男性から女性に向けていう場合に限定されることになる。

問七　「たなばたのつままつよひの秋風にわれさへあやな人ぞこひしき」の和歌は、拾遺和歌集では、初句が「ひこぼしの」となっている。初句の違いによって生じる意味について、最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　「たなばたの」という初句の場合、七夕の祭のとき、この日は年にただ一回だけ彦星と織姫が出会える機会であると

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

いう歌になって、男女双方から互いに「つま」ということになるのに対して、初句が「ひこぼしの」だと、男性である彦星が女性の織姫を待つ歌になり、「つま」は一方的に女性をさすことになる。

b　「たなばたの」という初句の場合、「秋風」が「飽きる」の掛け詞の機能をもち、織姫が彦星に飽きられているにもかかわらず、むなしく待っていることになって、「つま」は男性を意味することになるのに対して、初句が「ひこぼしの」だと、男性である彦星が女性の織姫を待つことになって掛け詞にはならない。

c　「たなばたの」という初句の場合、七夕の祭のとき、彦星が織姫のことを恋しく思うように、男性作者である自分も織姫のことが恋しく思われるという歌になるのに対して、初句が「ひこぼしの」だと、男性である彦星が女性の織姫を待つことになり、彦星と同じ男性である自分も女性の「つま」が恋しく思われるという歌になる。

d　「たなばたの」という初句の場合、女性である織姫が「つま」である彦星を恋しく待っていることになり、「つま」は男性を意味することになるのに対して、初句が「ひこぼしの」だと、男性である彦星が女性の織姫を待つことになり、結局「つま」は女性という、まったく逆のことになる。

e　「たなばたの」という初句の場合、七夕の祭の日になってもやってこない彦星のことを、「つま」である織姫がただひたすら待つことになって、「つま」は女性を意味することになるのに対して、初句が「ひこぼしの」だと、「つま」である彦星を織姫がただひたすら待つことになり、「つま」は男性という、まったく逆のことになる。

問八　筆者は「つま」という語の使い方について、どのように考えているのか。最も適当なものを選択肢から一つ選べ。

a　万葉集でも松浦佐夜姫がよんだ和歌で、「つまごひ」と男性を恋い慕うよみ方をしているのも、男性のことを「つま」と指していっている。また「たなばた」の和歌でも、男性にあたる彦星を「つま」とよんでいる。このように考えれば、男性のことを「つま」とよむのが正しく、女性だとするのはむしろ間違いだった、と筆者は考えている。

b　万葉集では松浦佐夜姫のことを「つま」とよみ、「たなばた」の和歌では男性にあたる彦星のことを「つま」とよんでいるところから、奈良時代から平安時代にかけてよみ方が変化していった。つまり、古くは男女ともに「つま」とよ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

んでいたのが、和泉式部の時代になって男性のみを「つま」というようになった、と筆者は考えている。

c　万葉集では松浦佐夜姫のことをよんだ和歌で、「つまごひ」と女性を恋い慕うよみ方をし、また「たなばた」の和歌では男性にあたる彦星が女性のことを「つま」といっている。従って「つま」を男性とするか女性とするか、今のところ結論は出せない、と筆者は考えている。

d　万葉集では松浦佐夜姫がよんだ和歌で、「さよひめつまごひに」と男性のことを「つま」といっているかと思えば、「たなばた」の和歌では「たなばたのつま」と彦星・織姫双方から互いに「つま」とよんでいるとする。このような例から、古くはむしろ男性のことを「つま」といっていたのが、次第にどちらからもいえるようになった、と筆者は考えている。

e　万葉集の松浦佐夜姫の立場にたってよんだ和歌で、「つまごひ」と男性を恋い慕うよみ方をしているのも、男性のことを「つま」といっており、さらに、「たなばた」の和歌では女性である織姫から男性である彦星のことを「つま」とよんでいる。このように考えれば、女性だけでなく、男性のことを「つま」とよんでも差支えない、と筆者は考えている。

問九　傍線部Ⓐを現代語訳せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第四講　復習問題

① 次の文章は、主人公の中納言が唐の国へ渡り、その地の后を見かけ、その美しさに感動している場面である。これを読んで、後の問に答えよ。

〈中略〉洞庭といへるところに、御門御幸（みかどみゆき）したまひ、中納言もつかうまつりたまへるを見たてまつらむと、遠き国の人びとさへ残りなくつどひて、かたちありさま見るに、肝消えて思はぬなく、及ぶまじきは病になりぬべく、われはと思ふ人びとぞ「かくておはするほどだにも、見え知られたてまつらばや」と心をかけて思はぬはなかりける。…（以下略）

問　中納言の容姿を見て唐の国の女性たちはどのように思ったのか。最も適当なものを一つ選べ。

a　唐の国の女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また、中納言の相手として釣り合うほどの容姿をもたない者は病気になってしまいそうで、自分こそはと思っている女性たちだけが、せめて自分がここにいることだけでも、中納言に知ってほしい、と思った。

b　唐の国の女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また、中納言に対する自分の思いが届かない者は病気になってしまいそうで、自分こそはと思っている女性たちだけが、せめて自分が独身でいる間だけでも、中納言と知り合いになりたい、と思った。

c　唐の国の女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また、中納言の相手として身

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

分違いの者は病気になってしまいそうで、自分こそはと思っている女性たちだけが、せめて中納言が唐の国にいる間だけでも、自分の存在を相手に知られたい、と思った。

d　唐の国の女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また、中納言の相手として年齢の釣り合いがとれない者は病気になってしまいそうで、自分こそはと思っている女性たちだけが、せめて中納言がもう少し年をとっていたら、自分とかかわることはなかったのに、と思った。

e　唐の国の女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また、中納言と遠く離れた地に住んでいる者は病気になってしまいそうで、自分こそはと思っている女性たちだけが、せめて后がいる間にでも、后の力で中納言と知り合いになりたい、と思った。

②　「枯れでさはこの花やがてにほはなむふるさと恋ふる人あるまじく」の和歌のおおよその意味として、最も適当なものを一つ選べ。

a　この花はひとたび枯れても、あなたのいうとおり、いつかは美しく照りかがやくに違いありません。日本を恋しがって悲しむ人がないように。

b　この花は枯れることもなく、あなたのいうとおり、いつかはすばらしい香りを放つようになるに違いありません。日本を恋しがって悲しむ人がこの世からなくなるまでは。

c　この花はひとたび枯れても、あなたのいうとおり、いつかはすばらしい香りを放ってほしいものです。日本を恋しがって悲しむ人を引きとどめるために。

d　この花は枯れることもなく、あなたのいうとおり、このまま美しく照りかがやくに違いありません。日本を恋しがって悲しむ人を慰めるために。

e　この花は枯れることもなく、あなたのいうとおり、このまま美しく照りかがやいていてほしいものです。日本を恋しがって悲しむ人がないように。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

③　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

（内侍の乳母）「〈中略〉（一品の宮は）まいて盛り過ぎさせたまひぬ、あな恥づかし、おぼろけの人見えたまふべくやはとて止みにしを、少将命婦の局になん、時々寄りたまふとぞあなりしを、人の言ひなすならん。すべて候（さぶら）ふ人につけてなど、かかることは出で来るなめり。またまねびをだになしたまひそ」と、…（以下略）

問　内侍の乳母は中納言の君に、狭衣の君のことについてどのように話したか。最も適当なものを一つ選べ。

a　「一品の宮は若さの盛りが過ぎていて、言い寄られるのはとても恥ずかしいことであり、狭衣の君には一品の宮のような普通の人では釣り合うはずがない。狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕えする人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから、二度と狭衣の君のことを口にしてはならない」と話した。

b　「一品の宮は若さの盛りが過ぎていて、言い寄られるのはとても恥ずかしいことであり、狭衣の君には年相応の普通の人がちょうど釣り合うだろう。狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕えする人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから、また狭衣の君のような問題は起こりうるだろう」と話した。

c　「一品の宮は若さの盛りが過ぎていても立派な方なので、狭衣の君にはそうではない普通の人がちょうど釣り合うだろう。狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕えする人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから、あなたも狭衣

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

の君のような行動をしてはいけない」と話した。

d 「一品の宮は若さの盛りはまだ過ぎておらず、とても立派な方なので、普通の人では釣り合うはずがない。狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕えする人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから、また狭衣の君のような問題は起こりうるだろう」と話した。

e 「一品の宮は若さの盛りが過ぎていて、とても不審なことではあるが、狭衣の君とは一品の宮のような普通の人でも釣り合うのかもしれない。狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕えする人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから、二度と狭衣の君のことを口にしてはならない」と話した。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

【第四講】

〈模範解答〉

問一　c　**問二**　a　**問三**　d　**問四**　e
問五　c　**問六**　b　**問七**　d　**問八**　e
問九　ただ根拠としてひかれる歌を伺って、心の疑問を断ちたいと思うのです。

〈現代語訳〉

今朝はしも……＝霜の降りた今朝は、私を愛してくれるような人は便りがあったでしょうに。「つま」のいない寝室はどうであるかと。

問う、「女の歌で、〈男のことを〉〈つま〉と詠んでいいのだろうか。ただ、〈つまなきねや〔＝「妻」のいない寝室〕〉と詠んでいるのは、そのままでは根拠がないように思われる。〈つまなきこひをわれはするかな〔＝恋人もいないのに私は恋をしているよ〕〉という歌を思っているのだろうか。それなら根拠があることだが」。

答えて言う、「この質問はどういうことでしょうか。ただ長年知っておりますようなのは、〈つま〉ということは、男女の仲は、互いに〈つま〉というと知っております。男は女を〈つま〉といい、女も男を〈つま〉というそうだ。女（のことだけを）を〈つま〉というべきだと（いう説）は何に出ているのか。これは根拠としてひかれるべき歌が多くあるでしょうか、いや、ないでしょう。まず『伊勢物語』に、〈つまもこもれりわれもこもれり〉という歌（があり、その歌）は、女の歌で、男が武蔵野に隠れていたところ、（その）野を焼こうとしたので、女が詠んだのです。〈つまもこもれり〔＝「つま」も隠れている〕〉とは、自分の夫（のこと）をいったのだろう。〈われもこもれり〔＝私も隠れている〕〉とは、女自身のことであろう」。

また問う、「（あなたが）おっしゃっていることは、道理がある。世間に歌枕（という本）があるようですが、多くは女を〈つま〉という。あるいはまた、〈わかくさ〉という。またある本には、（あなたが）おっしゃるように、男女の仲を〈つま〉という

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

とも書かれてあるように思われるので、どちらか一方に決まっているだろうとも申しにくい。さて『伊勢物語』は、その歌の意味を考えますと、もしかしたら書き間違えたのではないだろうか、とも思うのです。その理由はこれは、男が、人の娘を盗んで、武蔵へ連れて来たところ、（男は）盗人だったので、国守に捕らえられてしまった。女を草むらの中に置いて去ってしまったので、道行く人が、〈この野はぬす人あなり〔＝この野には盗人がいるそうだ〕〉と言って火をつけようとしたので、女が詠んだと書いてあるようです。したがって、二人とも隠れているとは書いていません。これは前の歌（の解釈）と違っている。また、〈わかくさの〉というのは、男の言葉として言われたのでしょうが、女が急に男を若いというのも道理に合わない。また、〈わかくさ〉ということは、妻をいうと（本に）あるようですから、〈あしひきの山〉〈あらたまの年〉などというように、〈わかくさのつま〉などと（「つま」にかかる掛詞として）詠まれているようです。またこの歌を『古今和歌集』に、〈題、よみ人しらず〉と書いて、（「武蔵野」を）〈春日野（かすがの）〉と改めて（載せて）いるようですから、このことからも（この歌を女が詠んだとするには）疑いが残るのだ。『日本書紀』に、須佐之男命（すさのをのみこと）が〈いづもやへがきつまごめに〔＝出雲の八重垣。妻をこもらせるために〕〉と詠み、また明日天皇〔＝明日、天皇〕が皇后に贈る歌に、〈あひおもふつま〔＝互いに思いあう「つま」〕〉と詠んでいますよ。また『万葉集』には、たくさんのことも、どのようにでも書かれてあるものですので、決めにくいのですが、〈妻〉と書いて〈つま〉と読み、また〈嬬〉をも〈孋〉をも〈つま〉と読んでいるようです。したがって辞書に、〔「つま」とは〕「妾の意味である」と説明されています。（表記が）決まっていないとはいえ、そうはいってもやはり〈春〉の字を〈秋〉と読み、〈雪〉を〈霞〉とは読まれないでしょう。地名でも、〈朝妻〉〈吾妻〉を〈（あさ）つま〉〈（あ）づま〉と言い伝えています。親しい者を〈つま〉と読むならば、〈夫〉の字、〈父母〉〈兄弟〉の字をも、〈つま〉と読まれているのではないでしょうか（、ですが、読まれることはないです）。しかしながら、（和泉）式部は中古の（歌の）名人ですから、男を〈つま〉と読んでいますので、理由があるのでしょう。したがっていちずに非難することはできません。ただ（私は）根拠としてひかれる歌を伺って、心の疑問を断ちたいと思うのです」。

予〔＝作者である藤原清輔〕がこのことを考えると、『万葉集』に、松浦佐夜姫を詠んだ歌に言うには、

とほつひと……＝（領巾振峰（ひれふりのみね）というのは）松浦佐夜姫が〈つま〔＝夫〕〉を恋うて領巾（ひれ）を振って以来ついている山の名前だ。

このように男（のこと）をも〈つま〉というのか。また言うには、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

たなばたの……＝織女（たなばた）〔＝織姫〕が〈つま〔＝彦星〕〉を待っている今夜の秋風に〈吹かれていると〉、私までわけもなく人恋しい。

このようにありますので、男（のこと）をも〈つま〉というのだろう。

〔重要単語〕

○よしなし【由無し】…①**理由がない**。②**手段・方法がない**。③関係がない。④無益だ。⑤よくない。

○おぼゆ【覚ゆ】…〔自動詞〕①**自然に思われる**。②思い出される。③**似る**。④（他人から）思われる。
〔他動詞〕①思い浮かべる。②記憶する。③思い出して語る。

○としごろ【年頃】…**長年**。

○たがふ【違ふ】…①**くい違う**。②そむく。③変わる。④行き違う。

○ゆゑ【故】…①**原因・理由**。②趣。③**由緒**。④**縁故**。

○よろづ【万】…①万、**数が多いこと**。②**万事**。

○ともかうも〔＝ともかくも〕…①どのようにでも。②（～＋打消）どちらとも（～ない）・なんとも（～ない）。

○さすがに…**そうはいってもやはり**。

○あやなし【文無し】…①**道理がたたない**。わけがわからない。②**むなしい**。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第四講　解答解説

〔解説〕

① 選択肢「唐の国の女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また」と「〜者は病気になってしまいそうで、自分こそはと思っている女性たちだけが――と思った。」の部分はすべて共通。「〜者」の「〜」部分の本文該当箇所は「**及ぶまじきは**」の部分である。直訳すると「及ばない（者）は」。何が及ばないのか選択肢を見比べてみると、a「容姿」、b「自分の思い」、c「身分」、d「年齢」、e「場所」にそれぞれ言及している。こういう場面（恋愛系）で使われている場合、身分の話であることが多いが、明確に書いているわけではなく決めかねるので、ひとまず保留が妥当。次に、「――と思った」の「――」部分を確認。本文該当箇所は「**かくておはするほどだにも、見え知られたてまつらばや**」の部分。まず「かくて**おはする**」と**尊敬語**を使用していることに注目。セリフの中で尊敬語を使用しているため、そこの主語は「自分以外」（話している人が天皇でないため、自敬表現は考えられない）。よって、「せめて自分が」となっているa・bは削る。該当部分を直訳すると、「せめてこのようにいらっしゃる間だけでも、知られ申し上げたい」。「このように」の解釈だが、リード文の情報もあわせて、唐の国に来ている中納言を見ながらの発言であることから、cの記述に特に不都合がない。「知られたい」とはかけ離れている解釈のdは削る。「このようにいらっしゃる」の主語が「后」になっていることと、「后の力で」ということが読み取れないためeも削る。よって、cが正解。

② 「枯れ**で**」の「**で**」は打消接続。よって、「枯れない」ので、「ひとたび枯れても」となっているa・cは削る。三句目「にほは**なむ**」の「**なむ**」は、「未然形＋なむ」であることから「他者願望（＝〜してほしい）」。よって、eが正解。

③ 「盛り過ぎさせたまひ**ぬ**」の「**ぬ**」は、「連用形＋ぬ」なので「完了の助動詞」。よって、「盛りは過ぎた」ので、「過ぎておらず」となっているdは削る。「おぼろけの人見えたまふべく**やは**」の「**やは**」は反語。「おぼろけの人」は選択肢から「普

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

通の人」という解釈になることがわかる。選択肢より、その続きが「釣り合う」か「釣り合わないか」のような話をしているので、その解釈にあわせて本文「見えたまふべくやは」を解釈すると、「結婚なさるだろうか、いや、しない」となり、結論として「釣り合わない」といっていることがわかる。よって、正解はａ。ちなみに、選択肢「狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕えする人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから」の部分は共通。その続きの本文該当箇所は「またまねびをだに**な**したまひ**そ**」の部分。「**な**〜**そ**」は禁止であるので、少なくともａ・ｃ・ｅに絞れることから、万一、ｂかｄを選んでしまった人は「な〜そ」に気をつけること。

〔解答〕

①　ｃ　②　ｅ　③　ａ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。